

高知精神保健

発行所 高知市丸の内1丁目2-20
高知県健康福祉部障害保健福祉課内
高知県精神保健福祉協会
電話：088(823)1111・088(823)9669(直)
FAX：088(823)9260
E-mail：kochi-mhwa@s2.dion.ne.jp
発行人 井上 新平 編集人 谷 晃

第239号

精神障害者の芸術作品

高知県精神保健福祉協会会長 井上 新平

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、「変」が1年を象徴する漢字として選ばれた年でした。事件、自然災害、金融危機などかつてなく「変」な出来事が数多く発生した、首相の突然の交代、印象深いスポーツ選手の引退など「変化」の年であった、オバマ氏のキャッチフレーズが「Change（変化）」であった、などが選ばれた理由でした。実際、次々に「出来事」が生じたので、昨年2月のイージス艦「あたご」漁船衝突事故や土浦市のJR荒川沖駅での指名手配中の男による通り魔事件など、遠い昔の事件のように思われるほどです。このような「出来事」は、それを直接体験した人たちに限らず、一般にも良い影響を与えないことが懸念されます。一見忘れたようでも「出来事」は記憶に残り蓄積していきます。不安で落ち着かない感覚が残るといことです。

精神的健康に対する関心はますます強くなっています。実際、働く人の6割以上が強い不安やストレスを自覚しているという調査結果や、学校教職員の精神疾患による休職が過去6年間で2倍に増加したというデータなどがあり、多くの人で精神的健康が損なわれやすい状況になっています。また、不健康や病気を予防するのに効果があるとされている家族や地域の人間関係、すなわち支えあう力も弱くなっています。私たち精神保健に関わる者にとって、治療・ケア・対処などを提供していくことも大切ですが、何らかの社会的サポートをうまくつくっていくことも大きな課題になっています。

話は変わりますが、昨年末「精神障害者の芸術作品」の発掘・調査と普及啓発への活用に関する研究事業」が立ち上がりました。協会の親団体である全国精神保健福祉連絡協議会が主催するもので、精神障害者による芸術活動を、精神保健・教育・芸術・歴史の視点から評価し、その活動を支援していくことが目指されています。高知からは縁あって織田信生（画家）、山本二昭（地域生活支援センター広場そよかぜ）、井上の3人が運営委員として参加しました。作品紹介のご案内が、すでに病院・診療所、精神保健福祉センター、社会復帰施設、家族会に届いており、皆さまの中には関心をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。

この活動は精神障害の啓発にとってきわめて有益です。障害者の活動が正当に評価されることは、協会の重要な目標のひとつで、病気をもつポジティブな側面が評価され、ストレンクスが注目されることになるからです。協会としてもこの運動に積極的に関わっていきたいと思っています。

本年も様々な問題意識をもって協会の活動を進めてまいります。皆様のご理解、ご支援をよろしく願っています。

参考：「作品紹介のお願い」については全国精神保健福祉連絡協議会のホームページをご覧ください。

アドレス <http://renraku-k.jp/>

目次

精神障害者の芸術作品	1
第48回高知県精神保健福祉大会 講演「学校は、いま。」	2
シンポジウム	3
平成20年度DV防止講演会	4

西日本障害者就労支援ローカルネットワーク	4
こころをつなごう in 須崎	5
正式種目で、初優勝！	6
精神保健福祉ソフトボール大会の結果について	6

第48回高知県精神保健福祉大会

講演

「学校は、いま。」

関西国際大学人間科学部教授 清水 将之

若い世代の評判がよくないがその誤解を解いておきたい。まず青年の自死の数、殺人を犯す少年の数はいずれも減っていて、世代間を比較したピークの「峰」も消えている。思春期に性ホルモンが分泌され性欲が湧いてきて、その結果攻撃性も湧き上がってくる。それが今の日本では自分自身に向けても他人に向けても極限的な攻撃性を向けなくなっている。報道で取り上げられる事件の特異性より、むしろ若い世代の実態が非常に気になる。

学校では、洋の東西を問わず近代化に伴い教育が制度化・細分化され、学校・学級のほうが自己目的化してしまい、管理される対象としての子どもや教員のメンタルヘルスの崩壊をまねいてきたことが歴史的にあきらかになりつつある。

私は学校の精神保健にかかわるようになって40年たつが、そのような背景を抜きにして最近学校で起こる問題について、何でも「教育の問題」「こころの問題」として片付けすぎるのではないか。その意味から学校保健室の養護教員のケーススタディに力を注いでいる。

専門家でなくても、柳田邦男氏が提唱している「ノーテレビデイ」「ノー携帯デイ」「絵本の読み聞かせ」などを通じて、大人が率先して子どもとの対話を取り戻す道もある。習志野市秋津地区の事例のように、少子化で空いた教室を地域に開放して始まる『学校再生で町育て』のような取り組みもある。

参考

柳 治男「<学級>の歴史学」講談社・選書メチエ
岸 裕司「学校開放でまち育て」学芸出版社



シンポジウム講師

シンポジウム

「学校を元気にするために 私達は何ができるか」

高知県前教育長 大崎 博澄

今なぜ、教育や学校が、これほどまでに追い込まれた状況にあるのか。

学校も社会の一部、現代社会そのものが、例えば構造改革、規制緩和、自由競争の名のもとに、経済的な格差の拡大などで、疲れ切っている。現代社会が疲れれば、社会の縮図である学校が疲れるのは当然。

学校の疲れをどうやって癒し、元気にするか。

第一は、教育の責任を家庭、学校、地域社会が等しく分かち合うこと。第二は、次代を担う子ども達の教育に私達がもっともっと感心を高めること。このグローバルな世の中で、我が子だけの幸せが存在するわけではない。第三は、親と子のコミュニケーションの回復。人生に子どものために使うより大切な時間はない。第四は、コミュニティの再建。社会の教育力の回復のために、学校を核にしたコミュニティの再構築ができないか。私のテーマです。



シンポジウム講師

「スクールカウンセラー として学校に出向いて」

高知県臨床心理士会事務局長 池 雅之

高知県では全国的な傾向に比べ臨床心理士が学校現場に入る割合が少ない。学校に出向くと勉強、部活など概ね平穏である。一方で発達障害、家庭内暴力、虐待、自死などいくつかの不応事例、残念な結果にいたった事例などから潜在的な危機状態の存在が一部でうかがえる。

児童生徒、保護者、教職員、カウンセラー、それぞれの立場の違いから、言葉が意味どおりに伝わらなかったり、背景や相手の内側が見えないというコミュニケーションそのものの課題がある。カウンセラーがそれぞれの言葉を翻訳していく、そこからスタートすることも大事ではないか。大人から見て「不登校」と言うことで「不登校」を増やしているかもしれない。「登校支援」の促進とか、「いじめ」も「対人関係づくり」、「問題行動」も「適切行動支援」に取り組むなどと学校や社会が期待するイメージの言葉を投げかけていくことで、その可能性が広がっていくと思う。また個々の課題の背後にある不安を大人が理解していくことも重要である。

「精神科医と前教育委員の 目からみて」

高知大学保健管理センター医学部分室准教授 渋谷 恵子

まず、精神科医の目から見て、診察室で出会う今の子どもたちは

①悩んでいることが分かり難い。②社会から繋がりが切れていて存在感がない。③忙しい親をサポートする必要性がある。④子どもたちは本当に不安な時代を生活している。⑤幼少期から続くいじめ・虐待の影響、あるいは発達障害がベースにあるケースが多くなっていると感じる。

他方、今や日本の教員は世界一多忙と言われている。不登校や校内暴力、発達障害をはじめとする様々な子ども達への対応、対人関係能力を非常に必要とされる領域が増え、困難さと多忙を極めており、それが教職員の精神疾患による休職や不祥事を起こす教員の増加とリンクしている。今は親も教師も多忙でゆとりなく大変な時代だが、保護者だけでなく地域の方が一緒になって地域を再生し学校を支援することが大切であると思います。

からだ・くらし・すこやかに

 大日本住友製薬

www.ds-pharma.co.jp

平成20年度DV防止講演会
「家族関係の中で起きる
DV・虐待を考える
～被害者・加害者を生まないために～」

高知県では平成20年11月12日から25日まで平成20年度「女性に対する暴力をなくす運動」期間として、国際ソロプチミスト8クラブとDV被害者支援に関する協定締結、弁護士会によるDV被害者電話相談の実施、女性相談支援センターによるDV被害者支援ネットワーク会議の開催などを行いました。



DV防止講演会

また11月15日には、こうち男女共同参画センター「ソレ」において県民啓発のための平成20年度DV防止講演会「家族関係の中で起きるDV・虐待を考える～被害者・加害者を生まないために～」を開催しました。講師の竹下小夜子さんは平成9年沖縄で女性専門の精神科クリニックを開院し、DV被害者の心の回復やDV家庭の子どもの支援に取り組んでいる精神科医。

講演では、外から見えにくい家庭内の暴力や虐待、加害者による不平等な支配関係の手口や特徴を明らかにし、自殺にまでいたることもある被害者の心身の反応・PTSDなど精神科疾患について説明しました。パートナーから受けた虐待を子どもにも及ぼす虐待の連鎖を防ぐためにも、「誰か一人でもいい、その人のほんとうの気持ちを理解してくれたかどうか、決定的な違いを生む」という言葉をひいて、問題を自分だけで対処しようとせず、正直にうちあけることの重要性を説きました。

参考:

高知県女性相談支援センター
(配偶者暴力相談支援センター)
電話 088-833-0783
〒780-8015 高知市百石町3丁目11-6

西日本障害者就労支援
ローカルネットワーク
第1回全国大会・研修会 報告

平成20年11月3日(月)・4日(火)・5日(水)で、西日本障害者就労支援ローカルネットワーク 第1回全国大会・研修会in沖縄が開催されました。

このネットワークが設立された経緯は、今年3月、沖縄県で先駆的に就労移行支援に取り組まれている、特定非営利活動法人ミラソル会の一杉理事長が来高されたおり、「大企業が少なく、中小零細企業の多い地域で、真剣に障害者就労移行支援に取り組んでいる就労移行支援事業所のノウハウ、蓄積を共有化し、各地域での就労移行支援に活用してもらおう！」との呼びかけがあり、スタートしたものです。

社会福祉法人てくとこ会 多機能型事業所オーシャンクラブは、「ローカルのネットワークがほしいよね」と話し合ったときから参加しており、平成20年4月から本格的に就労移行支援に取り組んでいる事業所です。平成20年4月～12月現在で、就職者4名(内3名トライアル雇用中)を出しています。就労移行支援に取り組み始めたばかりではありますが、今回大会報告もさせていただきました。皆さんに、真剣に就労移行支援に取り組む事業所の活動状況を、少しでも知っていただきたく、今回の大会報告をさせていただきます。

大会初日は、各地域での就労移行の実践と現状・課題の報告会でした。発表者は、岡山県 社会福祉法人あすなる福祉会、兵庫県 NPO法人就労サポートセンターあかつき、高知県 オーシャンクラブ、沖縄県 医療法人卯の会あらた舎の4ヶ所でした。各地域・各組織でやり方は異なりますが、障害者を就職させるためにはどうすればいいかと悩みながら進んでいる現状が報告されました。どの組織も実際に就職者を出しており、確実に実績をあげていっています。

大会2日目は研修会。①「組織的取り組み前段階でのアプローチと実践」社会福祉法人 福岡市社会福祉事業団 つくし学園 成吉孝行氏 ②「介護保険事業所三障害者雇用の実践と就労支援」社会福祉法人 まつみ福祉会 山下政広氏 ③「医療法人での就労移行の



取り組みと実践」医療法人へいあん 比嘉真也氏 ④
「企業開拓の技法と実際」就労サポートセンター・ミラソル 河上英雄氏 から、話題提供がありました。組織的な取り組みが無くても、企業であっても、医療法人であっても、旧体系の施設であっても、障害者を就職させていく事を目指して取り組めば、それが実現する事が話されました。そして、実現させていくためのノウハウを惜しみなく語っていただきました。

大会3日目は、オプション視察。沖縄県の取り組みを、実際に視察させていただきました。就職したい！と思わせる、その準備に自然と向かわされる細かな工夫や仕掛けが織り込まれており、大変学びのある有意義な視察となりました。

「就労移行の風を吹かせたい！」就職した人たちの輝く顔が、就職を目指してやる気になって引き締まっていくみんなの姿が、私をつき動かしています。

社会福祉法人てくとこ会
多機能型事業所オーシャンクラブ
就労支援員 澁谷 文香

参考：
西日本障害者就労支援ネットワーク(ブログ)
<http://blogs.yahoo.co.jp/nisinihonrokaru1224>

精神障害者自助グループ 「ストローク」のご案内

新しい精神障害者の自助グループが発足します。仲間がいることを確認し、一息つき安心し、明日への活力を得ることを目的にします。

第1回は3月28日(土)16時から18時、高知市役所たかじょう庁舎大会議室、どなたでも参加自由です。

問合せ先=〒781-0011 高知薊野北町2-8-5
山本二昭(携帯 09011746622)

「こころをつなごう in 須崎」 「ともに生きる明日をめざして」

平成20年11月21日、須崎市立浦ノ内市民交流会館において、協会研修部主催の交流会が開かれました。朝は雨がパラパラと降りましたが、虹が出ていました。

吉本啓一郎先生(一陽病院)の基調講演、小川美智子さんのライブコンサート(童謡



など)の後、手作りの昼食(うどん、すし、てんぷらなど)、午後は手作りエコフレームの製作(ダンボールを

張り合わせたものに、素材を選んで絵や文字を描いたり、毛糸をはりつけたりする。)最後に何をつくったのか数名が解説しながら作品を紹介しました。



正式種目で、初優勝！

平成13年から始まった全国障害者スポーツ大会において、精神障害者バレーボールは平成14年高知大会からオープン競技大会として位置づけられ毎年同時開催されてきました。平成19年秋田大会までの運営が認められ、平成20年度「チャレンジ!おおいた大会」から正式種目となりました。10月11日から13日までの大会中「全国障害者スポーツ大会の一員」として参加者は歓待され、皇太子が競技を観戦されました。

知的障害、身体障害との合同のバレーボール競技開会式で、オープン競技としての前年度優勝の高知県チームのカップ返還はなく、そのことが「正式競技の初優勝は私たちが飾るんだ!」という意欲をかきたてました。毎年決勝まで勝ち残ってきた経験もあり3日間を勝ち抜き、決勝で大阪府チームを破りついに正式種目でも初優勝!

いつも練習をしている県立障害者スポーツセンター(春野)に正式競技とし初の優勝カップはやってきました。三障害の垣根を越えたスポーツでのノーマライゼーションの証として。(内ノ村晶、田所淳子)



バレーボール大会

平成20年度 精神保健福祉ソフトボール大会の結果について

I と き 平成20年10月7日(火)
II と ころ 高知県立青少年センター
III 日 程 開会式 8:50 試合開始 9:10 閉会式 15:10

優勝 海辺の杜ホスピタル
準優勝 土佐病院
第三位 ゆかい(一陽病院合同)
第四位 藤戸病院

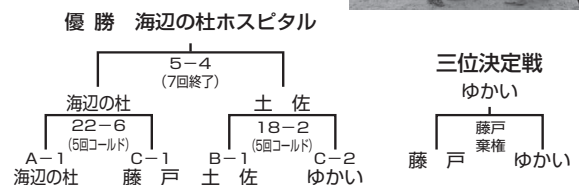
順位	施設名	成績	順位	施設名	成績
Aゾーン			Cゾーン		
1位	海辺の杜	2勝0敗	1位	藤戸	2勝0敗
2位	石川記念	1勝1敗	2位	ゆかい	2勝0敗
3位	高知ダルク	0勝2敗	3位	南国	0勝2敗
			4位	ハーモニー	0勝2敗

*Cゾーン1、2位は、得失点差で決定

順位	施設名	成績
Bゾーン		
1位	土佐	2勝0敗
2位	田辺	1勝1敗
3位	同仁	0勝2敗



決勝トーナメント



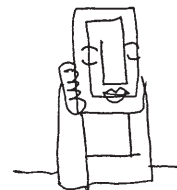
- * 決勝戦には、予選から順調に勝ちあがってきた海辺の杜ホスピタルと、実力伯仲のBゾーンで、同仁戦にサヨナラ勝ちを収めた土佐病院の対戦となりました。
- * 初回から2点ずつを取り合い僅差の好ゲームでしたが、わずかに海辺の杜ホスピタルが逃げ切り、優勝の栄冠に輝きました。おめでとうございます。
- * 今回は、全試合を投げ抜いた両チームの投手が最優秀選手賞、優秀選手賞を受賞しました。
- * 曇り空から、時折パラパラと雨が落ちてくることもあり心配しましたが、選手や応援の皆さんの熱気が天に通じて日程を消化することができました。各チームや審判団の方々の御協力に感謝申し上げます。

『精神科医療の真のパートナー』を目指して

精神科領域に特化した企業としての専門性を高めていくとともに、**患者・リハビリの企業活動を推進してまいります。**

吉富薬品株式会社
大阪市中央区淡路町2-5-6 <http://www.yoshitomi.jp/>

たとえば、**ナイチンゲール**だったら
どうするだろう、
と考える。



彼女の直筆の文字を使ったこのマークを見るたびに、いつも、自分たちに関心しています。



ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ
<http://www.eisai.co.jp>